

初期ラカンにおける反還元主義

—学位論文における心理-器質平行論批判を中心に—

Anti-reductionism in Lacan's Early Work :

An Analysis of the Critique of Psycho-physical Parallelism in his Thesis

河野 一紀

KONO Kazunori

要旨

本稿では、ジャック・ラカンの学位論文『人格との関係からみたパラノイア精神病』における心理-器質の平行論批判、さらにはラカン自身によって提出された平行論の検討を通じて、その初期の思索に認められる反還元主義的立場を明らかにした。

ラカンの反還元主義には、具体心理学の提唱者ポリツェルの影響が認められる。学位論文でラカンは、ヤスパースの了解関連という視点に訴えることで、「具体」や「全体性」といったポリツェルに由来する考えを自らの議論へと取り入れ、精神病の諸症状を人格の現象と同様に、諸要素へと還元することなく全体として把握する方法を導き出した。そして、還元主義的・局在論的な心理-器質の平行論に対して、フォン・ユクスキュルの環世界論をもとに、個体とその環世界からなる全体と人格の対応関係に基づく平行論が提示された。さらに、この平行論の根拠をスピノザの『エチカ』の一節に求めるラカンは、欲望概念をラッセルの「行動のサイクル」と結びつけることによって、個体の行動をその全体性において理解可能にする動因として位置づけたのであった。

さらに、1950年代にラカンがシニフィアン概念を採用し、了解関連という視点を放棄した後は、その反還元主義的立場は人間的現実を構成する互いに異質なもの同士の三つ組、すなわちサンボリック・イマジネール・レエルという三つ組の概念によってあらわされることになるという見通しを提示した。

1. はじめに

精神分析家として知られるジャック・ラカン (1901-1981) は、その学位論文『人格との関連からみたパラノイア精神病』(1932) において、当時の精神医学で優勢であった機械論的器質論に対するオルタナティブとなるパラノイア論を展開した。これについて筆者は既に別の機会に詳細に論じたが¹、その際に十分に取り上げることができなかった論点があった。それは、ラカンの主張に認められる反還元主義 *anti-réductionnisme* という立場についてである。

一般に、還元主義には3つの区分——方法論的還元主義、存在論的還元主義、認識論的還元主義——があるとされるが²、これらは精神医学や心理学においてどのようなかたちであられるのか。まず、認識論的還元主義とは、ある科学分野の知識を別の科学分野の知識へと還元することができるという立場であり、例えば、精神医学や心理学の知見はつまるところ神経科学の知見に吸収されるといった主張に認められる。次に、存在論的還元主義とは、存在するものは物理的対象のみとする立場であり、あらゆる心的現象は分子とその相互作用に還元されうると考える。そして、方法論的還元主義とは、複雑なシステムや現象はより単純な構成要素を分析することで理解可能であるとする立場であり、心的なものはより単純な感覚や知覚といった基本要素から構成されるとみなす。以上から明らかなように、これら

3つの立場はそれぞれに独立しているわけではなく密接に結びついている。では、ラカンの反還元主義的態度はどのような類の還元主義に向けられていたのだろうか。

ここで、パラノイア臨床の理論的前進を目的としたラカンの学位論文の位置づけを簡単に確認しておこう。ラカンはその冒頭で、精神医学における古典的な疾患分類、すなわち痴呆 *démence* と精神病 *psychose* の区別を取り上げる。エミール・クレペリンは1893年に発表した『精神医学教科書』の第4版で、早発痴呆 *Dementia praecox* を不可避に荒廃化する経過をたどり、悲観的な予後をもつ疾患として提示した。そして、これと対置するかたちで、妄想は呈するが人格荒廃のない精神病として偏執狂 *Verrücktheit*、すなわちパラノイアが取り上げられた。つまり、クレペリンは原因ではなく経過と予後进行分类の基準としたのであり、ラカンはこの方法の「実り多さ」³ を評価していた。しかしながら、クレペリンの方法は病因という考えを退けたわけではなく、その限りにおいて、そこでは純粋な臨床の重要性は厳密に求められていたわけではないとも指摘していた⁴。そのために、予後という基準は次第に顧みられなくなり、学位論文の執筆当時には、早発痴呆あるいは精神分裂病 *Schizophrenie* にかんしては、器質的損傷とそれに相関した能力欠損がその原因として強調される傾向があったという。これに対して、思考や行動の秩序と明晰さが保たれているパラノイアは、器質的病変を想定した心理-器質の平行論 *parallélisme psycho-organique* による理解に馴染まないとされ、むしろ生来の体質 *constitution* に起因するという見方がフランスでは優勢であった。また、その病理は情動・判断・行動のいずれの水準で生じるものであれ、総じて「心的総合の特異な障害」⁵ とみなされていた。こうした当時の状況を踏まえ、ラカンは問題となる心的総合を人格と名づけ、パラノイアを人格の病として理解しようと試みたのであった⁶。

以上から理解されるように、ラカンがそのパラノイア論によってまず反対するのは、精神疾患の原因をもっぱら器質的・物理的病変に帰する立場であり、これは存在論的還元主義に相当する。しかし、そうした発想は精神医学を神経科学や生物物理学へと還元する企てとも無関係ではないため、認識論的還元主義もまた批判の対象となりうる。さらに、後述するように、ラカンの批判は彼自身が「精神医学における唯一の師」⁷ と後に呼んだガエタン・ガティアン・ドゥ・クレランボー (1872-1934) の機械論的と評された理論にも向けられていたことを踏まえるならば、そこには方法論的還元主義への異議も含まれているとみなしてよいだろう。

学位論文において、ラカンは人格の現象に「人間的意味 *sens humain*」を見出すことで、人格概念を客観的に定義することが可能になると主張し、この定義をもとに心理-器質の平行論とは別の平行論を提示している。ここで指摘しておきたいのは、ラカンは心理-器質の平行論によってはパラノイアを理解することはできないとしつつも、人格の現象を構成する器質的諸因子やその生物学的基礎を無視したわけではなかったという事実である⁸。この点にかんして、心理-器質の平行論は逆説的にも、精神病の病因における器質的諸因子の役割を適切にとらえることができていないとラカンは指摘し、むしろ自らの平行論こそが「[器質的諸因子の] 役割にかんして、適切な観察を基礎づける合理的概念もたらす理論」⁹ となると述べていた。

本稿では、学位論文における心理-器質の平行論批判、さらにはラカン自身による平行論の検討を通じて、その初期の思索に認められる反還元主義的立場を明らかにしていく。そのための準備として、ラカンの学位論文に大きな影響を与えた人物、具体心理学 *psychologie concrète* の提唱者ジョルジュ・ポリツェル (1903-1942) についてまず取り上げたい。

2. ポリツェルにおける具体と全体性

ポリツェルは『心理学の基礎への批判』(1928)において、当時の心理学の潮流を痛烈に批判したが、そこにはまたフロイトの『夢解釈』(1900)の読解に基づいた精神分析に対する批判、その抽象化 **abstraction** の傾向に対する批判も含まれていた。それは、フロイト理論における夢の顕在内容と潜在内容の区別、さらには、この区別に基づき一人称の私 **je** による夢の語りをその構成要素へと分解し、もっぱら形式的観点から考察する方法に向けられた批判であった。対して、ポリツェルは自らの立場を具体心理学と規定し、古典心理学が陥っている客観性と主観性の二項対立を乗り越えるべく¹⁰、この新たな心理学の対象としてドラマ **drame** を挙げる。では、ドラマとは何か。「ドラマは全体性においてとらえられ、一人称に結び付けられているがゆえに意味 **sens** を有する諸出来事を中心とみなされた人間を含意する」¹¹、あるいは、「我々が日々の体験をまず位置づけるのは、ドラマのなかである」¹² と述べられていることを踏まえるならば、ドラマとはある個人の総体としての生とみなすことができるだろう。また、心理学的事実としての振舞 **comportement** や出来事をドラマへと組み込むのは、当人が話す物語 **récit** であるとポリツェルは記している。こうして、ドラマとは社会的現実を生きる個人にかんする具体的な事実の総体であり、具体心理学とはそうした事実を扱う科学として位置づけられる。付言しておく、**drame** の語には18世紀から19世紀にかけて成立した、悲劇・喜劇という古典主義演劇の分類に収まらない、市民階級の日常の生活を写實的に描き出す演劇を指す含意があり、ポリツェルもまたこの用法を踏まえていると考えられる¹³。

ポリツェルは心理学における抽象化の傾向を批判するなかで、連合主義 **associationnisme** との密接な結びつきを指摘している。そこでは、連合主義とは「人間の諸行動の形態を崩した後、意味をもたず個性もない要素から出発して、意味 **sens** と形態という全体性 **totalité** を再構成しようとする古典心理学の根本的な手続き」¹⁴ と説明されている。そして、「[古典] 心理学者が人間のうちに認めようとする全体性は、「機能的」全体性、類 **classe** の諸概念が複雑に絡み合ったものでしかない……このような絡み合いというのは、複雑さの程度がどうであれ、ひとつの行為 **acte** ではないし、主体 **sujet** ではなく機能的中枢を想定している」¹⁵ がゆえに、「心理学は誤った全体性によって抽象化の次元にとどまっている」とポリツェルは指摘する¹⁶。つまり、ある事象の分析によってもたらされた諸要素を総合して得られるものは、もはや全体と呼ぶに値せず、その限りにおいて、具体的な個人の生——ポリツェルの表現を用いるならば、個人的ドラマ——は、個々の経験や知覚といった諸要素へとは還元不可能なのである。この点にかんして、ポリツェルは「個人の全体性は研究の終点や到達点ではなく、最初の仮説であるべきだ」¹⁷ と主張している。そして、個人のドラマの全体性は、先述したように、それが物語として語られるという事実によって担保される。つまり、一人称での語り・話す行為が個人ドラマをその全体性において提示するのである。

この点において、精神分析は古典心理学を乗り越える可能性を示している。というのも、精神分析は夢をはじめとした無意識の形成物や症状を取り扱う際、古典心理学のように原子論的要素からではなく、個人の語りから出発して、個人の具体的な生を参照しつつ、その内在的かつ全体的な意味に訴えるからである。ゆえに、具体心理学が対象とする人間とは、物質としての人間 **homme-matière** でなく、さらには精神としての人間 **homme-esprit** でもなく、「行為者としての人間 **homme-acteur**」¹⁸ である。ここで、「行為」との関連から、フロイトの夢理論に対するポリツェルの理解について補足しておきたい。彼は「夢は欲望 **désir** の成就である」という一節に注目する。そして、欲望とは抽象的なものではなく、個人に特異な経験によって規定された当人に固有の具体的なものであるという点を強調する。このような考えをもとに、欲望は夢に対して「私」の連続性を保証するものであり、個々の夢は欲望を成就させ

る「私」のその都度のあらわれであるという考えが導き出される。以上から、「夢・欲望理論によって、夢はひとつの「行為」になる」¹⁹ とポリツェルは主張する。無意識概念に訴えることを慎重に避けながら、「自らが見た夢を話す」という行為に一人称の「私」のあらわれを見出すポリツェルの発想は、個人が紡ぎ出す具体的な物語に全体的人間があらわれるという視点を提示する。つまり、「具体性」を通じてこそ「全体性」に至ることができるかとポリツェルは考えたのである。ここからはまた、人間を対象とした科学における「話す」あるいは「書く」といった言語社会的行為の重要性、あるいは言語そのものの重要性が強調されることになるだろう。実際、ポリツェル自身も具体心理学にとっての文学的資料の重要性を指摘していた²⁰。

以上のように、ポリツェルは具体心理学の構想において、人間を抽象的な諸要素へと還元するのではなく、その全体を具体的な一人称の語りによってとらえる方法を提示した。しかし、彼はその後、自らの心理学の基礎付けを弁証法的唯物論に求めてマルクス主義に傾倒し、精神分析から離反していった²¹。そして、彼の早すぎる死が具体心理学の展開に終止符を打ったのであった。本稿では次に、ラカンの学位論文におけるポリツェルの影響を検討していく。そこで我々は、ラカンがヤスパースの了解関連という視点を援用することで、「具体性」や「全体性」といった考えを自らの議論へと組み込んでいることを確認するだろう。

3. ラカンの学位論文における具体と全体性

ラカンの学位論文を通読してみると、「具体性/具体的 concret(ète)」の語が多用されていることに気づく。いくつか重要と思われる箇所を指摘しておく、まず結論部において、「パラノイア精神病の病理学的、予後的ならびに治療的問題の鍵は、具体的心理学的分析において探究されるべきである」²² とラカンははっきりと述べていた。また、自らの提出した自罰パラノイアという「原型 prototype」²³ の臨床的価値はその「具体的描写」²⁴ にあると主張している。実際、症例エメを提示する際、ラカンは詳細に「主体の感情史や志向的展開、社会的振舞といった具体的諸事実」²⁵ を記載していた。さらに、その研究はヤスパースの了解概念を採用する点において、「具体的なものに準拠している」²⁶ のであり、この方法がエメの妄想の基底にある「自罰傾向」²⁷ という「具体的傾向」²⁸ を明らかにするとされる。ラカンによれば、「精神症状は、あれこれの具体的傾向、つまり特定の対象に対する生きた統一性をもった振舞との平行関係 parallélisme に応じてのみ実証的価値をもつ」²⁹ のであり、具体的傾向こそが、精神現象に「志向内容」を与え、さらには、各々の症状や精神病に「真の意義 portée」を与える。また、学位論文ではポリツェルの名は一度も言及されないが、自らの研究がその方向性を示した「人格の科学」を素描する先駆的試みとして、精神分析とともに具体心理学の名が挙げられていた³⁰。さらに、精神分析にかんしては、フロイトにおける自我概念をめぐる混乱は、「自我をあらわし、ただそのようなものとしてのみ具体的発生に属する具体的諸傾向と、認識の主体としての自我の抽象的な定義のあいだの不十分な区別」³¹ に由来するとラカンは指摘していた³²。

このように、ポリツェルに倣い、ラカンもまた自らの研究が有する具体性を強調している。そして、先の引用で、「あれこれの具体的傾向」とは「特定の対象に対する生きた統一性をもった振舞」であると述べられていたように、具体的なものへの依拠が人間の思考や言動を全体性において把握することを可能にすると考えられている。他方、具体性は人格の客観的定義にとっても不可欠とされた。ラカンは人格に含まれるべき要素として、①伝記的發展、②自己についての概念形成、③社会的関係における緊張の3つを挙げており、これらはそれぞれ、①個人に特有な展開やそこに読み取れる了解関連、②個人の生の態度やそこに発見される自己を対象とする思考の弁証法的進展、③行動の実践的自律性とそこに

認められる倫理的関与の結びつきによって客観的に定義されると述べている。ここで挙げられている事柄は全て、個人の生活の具体的分析を通じてはじめて見出されうるものである。さらに、このように定義された人格は、「規則的かつ了解可能な発展」³³ というかたちでの統一を有しており、「人格の反応」とは「人間存在の全体的反応」³⁴ とされる³⁵。こうして、人格は諸要素に還元不可能な全体性を有したものと位置づけられる。同様に、パラノイアもまた、そこに「人格の現象」³⁶ と定義される諸特徴が認められるがゆえに、病的な諸症状において異常とみなされるとしても、全体として了解可能な具体的傾向を認めることができる、とラカンは主張する。

ところで、ラカンが人格を客観的に定義すると言うとき、そこで鍵となるのは了解関連 *verständlicher Zusammenhang/relation de compréhension* という視点である。ヤスパースによれば、了解 *Verstehen* とは「精神的なものを中から見ること」³⁷ であり、これは外から因果関係をとらえる説明 *Erklären* と対比される³⁸。ヤスパースは了解を静的了解と発生的了解に区別し、さらに後者を理性的了解と感情移入的了解に区別したうえで、感情移入的了解こそが「精神的なものの自体の真に心理学的な了解」³⁹ であると述べていた。

この了解関連という視点に訴えることで、人格を分析・定義する方法は「客観的」と呼ぶに値するものとなるとラカンは考えた。例えば、人格は「客観的形式」のもとで見出されるという主張は、人格が固有の展開をもち、その展開の諸相は区別されつつも継起・連続したものととして了解可能であるという事実をもとになされている。また、ラカンは人格に見出される連続的な統一性を「発展法則 *loi évolutive*」⁴⁰ と呼んでおり、ここには了解を自然科学的説明と同等とみなす態度が認められる。さらに、人格の連続性における状態の移行は、「感情移入する *participer affectivement (einfühlen)*」ことなしに「意味 *sens* をもつ」——ラカンはここに了解 *verstehen* の語を付している——がゆえに、「物理的自然界の諸現象を説明するために必要な因果的継起の法則 *loi de succession causale* をそこに見つける必要はない」⁴¹ と述べていた。以上の議論から、意味とは「人間の感情と行為の共通尺度」⁴² であり、「了解関連は確かな客観的価値を有している」⁴³ との主張が導き出される。また、この客観的価値の証左として、了解関連に訴えることによって、精神分裂病に顕著に認められる不統一/不協和 *discordance* という特徴を見出すことが可能になると指摘されている⁴⁴。後で取り上げるように、ラカンはこの語を用いながら、スピノザの平行論に独自の解釈を与えている。

こうして、了解という方法に訴えることで、ラカンは精神病を病者が呈する具体的な諸事象の全体というかたちで把握せんとする。「我々がエメの症例に適用したのは、こうした了解という鍵であり、それは他のいかなる理論的構想よりも精神病の現象の現実に一致しているように思われた。しかも、この現象は、抽象的に考えられたしかじかの偶発事においてではなく、全体性においてとらえられた精神病として理解されるべきである」⁴⁵。付言しておく、ここでの「全体性においてとらえられた精神病」という表現は、「ドラマは全体性においてとらえられた人間を含意する」⁴⁶ というポリツェルの表現を踏まえたものであると考えられる。

4. テーヌの平行論に対する批判

では次に、本稿の主題でもある心理-器質の平行論に対するラカンの批判を見ていこう。ラカンはイポリット・テーヌ (1828-1893) の名と結びつけられた平行論を、「誤った「平行論」」⁴⁷ として取り上げる。では、「テーヌによる誤った心身平行論」⁴⁸ とはどのような主張なのか。これは別の箇所では、「精神自動症という語で改めて取り上げられた精神-神経の平行論 *parallélisme psycho-neurologique*」⁴⁹ として言及されている。精神自動症 *automatisme mental* とは、クレランボーが提唱した、妄想性精神病

の基底に想定されるメカニズムであり、妄想や幻覚は器質的原因から自動的・機械的に生じるとみなされる。つまり、テーヌの心身平行論とは、当時の精神医学において優勢であった機械論的器質論と同じく、「あらゆる表象は何らかの神経性の反応によって生み出される」という想定に基づいており、それゆえに「あらゆる客観性を徹底的に破壊している」⁵⁰ という。ここでの「客観性」とは、先に見たように、了解関連のもとで把握される人間的現象の意味によって担保された「客観性」である。器質論者は、幻覚や妄想といった現象を患者の振舞や認識の総体から切り離し、独立したものとして取り扱いつつ、「〔そうした現象の〕物質性/実在性 *matérialité* に関する根拠のない主張が、客観性原理の代わりになると信じている」⁵¹ 限りにおいて、ラカンが言うところの「客観性」を破壊している。さらに、器質論者がその客観性の拠り所とする知的感情や微細障害といった考えは、それ自体が抽象の産物に過ぎず、「〔器質論者にとっては〕分析による抽象が具体的現実となっている」⁵² という。

テーヌに対する批判についてさらに検討するために、「現実原理の彼岸」(1936)を参照しよう。ポリツェルの影響が色濃く反映されたこの論文では、テーヌの主張に認められる連合主義的・原子論的傾向、すなわち、知性の高次機能である認識や理性の働きを感覚という所与へと分解し還元する傾向が批判されている。テーヌによれば、我々の認識は記号 *signe*、イメージ *image*、感覚 *sensation* の3つの諸要素に分けられるという。そして、我々の思考 *idée* を生み出す記号はイメージへ、イメージは感覚へ（さらに、感覚はより単純な感覚へ）と分解・還元可能であるとの考えのもと、我々の認識は感覚から生み出されるというコンディヤック的主張がなされる。ラカンはこうしたテーヌの考えを批判するのだが、それはポリツェルの主張を踏まえていると考えられる。ポリツェルは『心理学の基礎への批判』において、連合主義・感覚主義的なイメージの古典論者としてテーヌに批判的に言及していた⁵³。さらに、テーヌの影響を受けた心理学者テオデュール・リボー (1839-1916) について、脳に思考を収めるために必要な脳細胞の数を数え、それが科学的心理学の誕生をもたらしたと揶揄していた⁵⁴。このように、ラカンはポリツェルとともに、連合主義とその背後にある原子論あるいは要素還元主義を批判する。

しかし、テーヌに対するラカンの批判は、それだけにとどまらない論点を含んでいる。まず指摘しておきたいのは、ラカンが連合主義批判を通してイメージの重要性を強調しているという事実である。テーヌの理論では、イメージは感覚からつくりだされた、心的領野におけるその代替物とみなされており、その限りにおいて、感覚そのものよりもエネルギーが低く、精確さを欠いているとされる。また、大脳に記憶されたイメージは、感覚なしにでも自発的に想起され、認識を生み出すという固有の力動性をもつと考えられた。このように、テーヌは我々の認識や思考はイメージによって担われていると主張するのだが、その身分はあくまで感覚の代用物に過ぎない。ところで、テーヌが言うように、我々の認識が感覚なしに想起されたイメージをもとに生み出されるならば、我々の認識とは「対象なき知覚」として理解される限りにおいての幻覚 *hallucination* に他ならないのではないか。テーヌはこの問いかけに首肯するだろう。というのも、テーヌは「外界の知覚は真の幻覚である」⁵⁵ という驚くべき主張をおこなっているからである。テーヌによれば、イメージに対応する感覚が存在する場合には、イメージのエネルギーと精確さは増大するが、そうでない場合では拮抗する感覚によってイメージは打ち消されてしまうという。そういうわけで、「真の幻覚」とは、イメージと外界の対象、すなわち「現実」との対応関係の照合における一致を含意している⁵⁶。以上の議論から理解されるように、テーヌにおいてイメージとは、「^{ぼか} 暈された現実 *réalité dégradée*」⁵⁷ に過ぎない。対して、後述するように、ラカンは「イメージの現実」⁵⁸ に対して、人間に固有の現実という身分を与えたのであった。

また、イメージは大脳に記憶されるというテーヌの考えに対しても、ラカンはベルクソンの『物質と記憶』に言及しつつ異議を唱えている⁵⁹。器質論者の考えでは、脳は自己の身体の運動や志向過程、環

境の印象を記録する貯蔵庫としての役割を果たしている」とされるが、そこにイメージを含めることはできないとラカンは指摘する。つまり、イメージは脳のなかに局在されず、生理学的対応物ももたないとされる。さらに、イメージは「それに物質/素材 *matière* を与える感覚そのもの」⁶⁰ においてのみ位置づけられると述べつつ、イメージの固有性を強調することで、ラカンは自らの主張を脳機能局在論の誤謬から遠ざける⁶¹。脳機能局在論とは、脳の各領域が各々の仕方で行動や精神機能に関与するように特殊化されているとする理論であり、1920-30年代にかけて大きく進展した。なかでも、カール・クライスト⁶² は、第一次大戦による脳損傷事例や、大戦後から1920年代末まで流行した嗜眠性脳炎（エコノモ脳炎）事例の研究によって明らかになった脳幹部の機能とその欠損症状についての知見を取り入れ、脳局在論を発展させた。脳機能局在論もまた、心的機能が脳の特定の部位によって担われるとする点で、存在論的還元主義に含めることができる。

加えて指摘しておく、知覚の幻覚的本性を強調したテーヌに対して、ラカンもまた自らが「妄想的思考 *pensée paranoïde* の形式」⁶³ と名付けるパラノイア精神病を中核とした精神病の妄想に特有の諸形式が、妄想のみならず知覚一般にも認められると指摘し、以下のように述べていた。「妄想の要素的現象と、一般的組織化とのあいだのこの驚くべき構造的同一性は、植物によって具体化される形態発生のタイプにアナロジーの準拠を置いている。間違いなく、このイメージは、我々が以前の発表の際に、口頭のみ教えの危ういアナロジーから借りた環形動物との比較よりも妥当である」⁶⁴。ここで言及されている「以前の発表」とは、「パラノイア精神病の諸構造」(1931)であり、ラカンはそこでクレランボーによる口頭での教えに言及しつつ、妄想的解釈の構造は階層構造をもたず、「原初的所与のセリー」であるという点で、「脊椎動物でなく環形動物である」⁶⁵ と述べていた。つまり、環形動物が同一構造を有する体節の繰り返しによって構成されるように、妄想にも同じ構造の反復が認められるというわけである。では、なぜクレランボーのアナロジーよりも植物のアナロジーのほうがより妥当であるのだろうか。ここで問題となっているのは、脊椎動物と無脊椎動物（環形動物）の対比であると考えられる。人間を含む脊椎動物よりも単純な脳構造しかもたない無脊椎動物（環形動物）に妄想の構造を比することは、パラノイアを器質的損傷やそれに由来する機能欠損との関連において理解する見方につながりかねない。それを避けるために、ラカンは神経系をもたないとされる植物のメタファーに訴えたのではない。また、ラカンは学位論文の第1部においても、植物形態学は非常に異なる外観のもとに同じ構造的特徴が現れることを明らかにしていると指摘していた⁶⁶。

ラカンによるテーヌ批判は、精神病の諸症状を「認識の現象」⁶⁷ とみなすことなく、もっぱら器質的・機能的欠損へと還元してしまう点に向けられている。これに対して、ラカンはパラノイアに人格の現象の諸特徴を認め、その症状を心因発生的 *psychogénique* と定義する。そして、そこに固有の「二つの因果系列」、すなわち人格と器質という互いに独立した因果系列を想定し、まさにこのような考えがテーヌの平行論への反論になっていると主張するのである⁶⁸。

5. 環世界論とイメージ

テーヌの平行論を批判した後、ラカンは自らが擁護する平行論を以下のようなかたちで提示する。「人格は中枢神経系の諸過程に「平行」ではないし、個体の身体的諸過程の総体だけにさえも平行ではない。人格は個体とその固有の環世界 *milieu* によって構成される全体性に平行なのである」⁶⁹。そして、「その名に相応しい唯一のもの」⁷⁰ とされるこの平行論は、スピノザに由来することが指摘される。

ここで、スピノザの平行論を取り上げる前に、自らが擁護する平行論を提示した一文にラカンは付している註に注目しておきたい。そこでは、環世界 *milieu/Umwelt* という概念の提唱者であるヤーコブ・

フォン・ユクスキュルの名が挙げられており、『生物の環世界と内的世界』(1909)をはじめとした仕事でユクスキュルが打ち出した環世界という概念について、「ある意味で、その一部をなすほどに、個体の特殊な組織化に結びつけられているようにみえる」⁷¹とラカンは述べている。この概念は、個体とそれが生きる世界とをひとつの全体としてとらえ、この全体を人格とパラレルなものとして位置づけることを可能にするという点で、ラカンの平行論にとって決定的に重要である。

ユクスキュルは環世界論において、人間を含む生物は客観的な環境 *environnement/Umgebung* ではなく、各々に固有の環世界に棲まっていると主張した。生物は環境や対象そのものではなく、知覚や行為を通じて自らにとって意味をもつ部分ともつばら関わり、意味をもたない部分には無関心であるという。その限りにおいて、環世界とはある生物にとって有意味なものから構築された世界なのである。こうした環世界の在り方を説明するにあたって、ユクスキュルは探索像 *Suchbild* と知覚像 *Merkbild* の区別に言及しながら、以下のような例を挙げている。友人宅での滞在中、毎日の昼食時に用いられていた陶器の水差しを、召使いが壊してしまったため、ガラスの水差しが代わりに置かれていたところ、彼はそれに気づくことができず、友人に改めて指摘されて初めてテーブルの上にその存在を認めたという。また、別の例として、ヒキガエルは長い空腹の後にミミズを食べると、それと形の似たマッチ棒にも跳びかかるようになるという報告を引いている。以上の例で問題となっているのは、「探索像が知覚像を破壊する」⁷²という事態である。ここから、人間もまた他の生物と同様に、単なる外界の知覚ではなく、個体の経験や反応から生み出される内在的なイメージの世界に生きているという考えが引き出される。

学位論文における症例エメの考察を一読すれば、ラカンがユクスキュルの考えからも大きく影響を受けていることは明らかである。例えば、エメの病理は人格の構造化におけるリビード固着による発達の停止に起因するとラカンは述べているが、そこで問題となっていたのは同胞(姉)のイメージへの固着であった⁷³。そして、エメの精神病が示す具体的諸傾向、とりわけ女たちによる迫害という妄想の主題において、この固着は顕著に表現されている。かくして、エメの精神病はイメージへの囚われの帰結として理解されるわけだが、ここで強調しておくべきは、ただ精神病患者のみがイメージへと囚われているのではないということである。人格の発展がリビードの組織化によって担われていると考えるならば、人間が生きる世界は本性上、各々にとって意味をもつイメージによって構築された各々に固有の環世界に他ならない。つまり、人間にとってイメージはそれ自体で自律した現実をつくりあげており、テーマが考えたように「客観的」とされる物理的現実との照合によってその真偽が判断されるようなものではないのである。ところで、先述したように、ラカンはベルクソンの『物質と記憶』におけるイメージの脳局在論批判を評価する一方で、イメージ概念による心身二元論、あるいは主客二元論の解体の試みが不徹底であることを論難していた。これに対して、ラカンはジェームズの純粹経験論を参照し、感覚 *sensation* と物質 *matière*、あるいは認識 *connaissance* と対象 *objet* の共通の起源とみなされる純粹経験とイメージを結びつけている⁷⁴。こうして、イメージは個人の人格と個人が生きる環世界にとっての共通の源泉として位置づけられ⁷⁵、両者はパラレルであるという主張が導き出される⁷⁶。

人格と環世界の関係についての補足として、学位論文では人格が「反応」という観点から論じられていたことに言及しておこう。ラカンによれば、「人格をもつ」という表現は、個人の行動の自律性とその模範的・道徳的価値を含意し、これらは「我々自身のなかの、現実の諸影響に対して制限を課す「道徳的」抵抗のうちに見出される」⁷⁷ため、人格は外界の諸影響に対する反応として立ち現れると考えることができる。その限りにおいて、人格は個人が生きる環境と独立には定義できず、「本質的に集団に相関的 *relative*」⁷⁸であり、人間にとっての環世界は「社会的」⁷⁹と形容されるべきなのである。

6. ラカンのスピノザ読解

ではいよいよ、スピノザの平行論を取り上げよう⁸⁰。ラカンは学位論文のエピグラフと第3部の最後でスピノザの『エチカ』の一節を引用している。それは第3部定理57であり、エピグラフではラテン語原典から“*Quilibet unius cujusque individui affectus ab affectu alterius tantum discrepat, quantum essentia unius ab essentia alterius differt.*”と引用されている。対して、症例エメについての考察が展開された第3部の最後では、「スピノザにおいて本質 *essence* という言葉が有している意味、すなわち、ある実体 *entité* によって概念的に定義された諸関係の総体、そして、スピノザが変状 *affection* という言葉に与えた情動的決定論の意味を思い起こすならば、この公式と我々の学位論文の基調との一致に驚かされるだろう⁸¹」と述べつつ、エピグラフと同じ一節を自らの手で以下のようにフランス語に翻訳したものを引用している⁸²。「ある個人の何がしかの病/変状は、その個人の本質が他者の本質と異なるだけいっそう、他者の病/変状との不一致/不協和を呈する *une affection quelconque d'un individu donné montre avec l'affection d'un autre d'autant plus de discordance, que l'essence de l'un diffère plus de l'essence de l'autre*」⁸³。そして、次のように述べることで議論を閉じている。「ある精神病の決定因となる葛藤や志向的症状、衝動的反応は、正常な人格の発展や概念的構造、社会的緊張を規定する了解関連に対して、主体の情動の歴史が規定する程度に応じて不一致/不協和である⁸⁴。ここでのラカンの主張の要点は、精神病の諸現象は正常な人格と同様に主体の情動の歴史によって作りあげられている限りにおいて、人格を規定する了解関連との不一致/不協和によって位置づけることができるというものである。ここでの不一致/不協和は正常と病理の隔たりをあらわしているが、それはパラノイアに人格の現象の諸特徴を認めることを妨げはしない。しかしながら、ラカンは自らの方法の限界も認めており、「精神病のより不協和な諸形式」が問題となる場合には、「精神病の了解可能性、概念的一貫性、社会的なコミュニケーション可能性」は把握がより困難になり、そこにおいて「還元不能な形式⁸⁵」のもとで心因発生的ではない諸要因——遺伝的要因、先天的要因、後天的器質要因——が明らかにされるという。

このようなラカンのスピノザ読解に対して、スピノザ研究の大家であるロベール・ミスライは、「ラカンの学説は実際のところ、スピノザの学説に忠実ではない⁸⁶」と指摘している。ミスライによれば、定理57でスピノザが論じているのは、個々人のあいだでの情動 *affect* にかんする差異であるのに対して、ラカンが問題にするのは、パラノイアがそこに含まれる心因発生的障害 *trouble psychogénique* が「人格に応じてしか意味をもたない障害⁸⁷」と述べられていたように、病者の内に認められる不一致/不協和、すなわち病前人格と精神病とのあいだのそれであるという⁸⁸。また、スピノザにおいて、本質のあいだの差異は数量化不可能であるがゆえに、ラカンの翻訳のように本質が異なるほどに病/変状 *affection* もまた異なるという解釈は適当ではないとされる。さらに、翻訳そのものにかんしても、ミスライはラカンによるスピノザの誤読を指摘している⁸⁹。

しかし、こうした誤読にもかかわらず、「人格（とパラノイア）にかんするラカンの学説の総体は、スピノザの学説の本質に合流する⁹⁰」という。なぜなら、スピノザとともに、ラカンもまた「欲望は人間の本質そのものである」と考えていたからである⁹¹。実際、欲望の個別性・具体性を強調したポリツェルにならい、ラカンは学位論文で欲望を「行動のサイクル」として定義し、「我々の患者の精神病は実際、何よりもひとつの行動のサイクルとして現れる⁹²」と述べていた。そして、この定義によって、欲望は個体の行動をその全体性において理解可能にする動因として位置づけられ⁹³、ラカンはエメの妄想構築と治癒の機序を「懲罰を求める欲望」に基づいて説明し、自罰パラノイアという臨床類型を提出したのであった。以上の議論を踏まえたうえで、ミスライは、「パラノイアは不一致/不協和の激発である」と考えたラカンにとって、「倫理的哲学の究極目的は...各々の人間の特異的本質をなす欲望の最も

悦ばしい実現における自己との一致にほかならない」⁹⁴ とする哲学者スピノザを自らの主張の根拠とするのは当然であると指摘している。

最後に、ラカンがその心理・器質の平行論を批判したテーヌもまたスピノザの読み手であったという事実にも言及しておこう⁹⁵。先に見たように、テーヌは連合主義の立場から、経験的事実は分析によってより単純な要素へと還元され、そうした諸要素の総合によって人間的現象が説明されうると考えた。また、心的現象は物理的現象と同様、経験的事実の分析あるいは抽象から導き出される一般法則もしくは必然的命題に従うと主張し、実証主義と決定論に与していた。これらを踏まえるならば、テーヌにとって、スピノザは「神即自然」という汎神論に基づき、人間に対する自然主義的・決定論的理解——人間は自然の一部であり、その一般的秩序に従うという考え——を肯定する哲学者として参照すべき存在であったと考えられる⁹⁶。だが、このようなスピノザ理解は、欲望の具体性を強調したラカンのそれとは大きく隔たっており、それゆえに、テーヌに抗して自らの平行論を提示する際に、その論拠としてラカンもまたスピノザに言及したのではないだろうか⁹⁷。

7.おわりに

ポリツェルの影響のもと、ラカンは学位論文において還元主義的傾向を有していた当時の精神医学に対して、反還元主義の立場から論陣を張った。そこでは、ヤスパースの了解関連という視点をもとに、パラノイアをはじめとする精神病を抽象的理論によって想定された器質的欠損へと還元することなく、具体的な臨床観察に基づいてその全体性においてとらえるアプローチが提出された。さらに、個人の行動を総体として把握可能とする動因として位置づけられた欲望概念をもとに、症例エメにおいて「自罰の欲望」⁹⁸が見出され、そこから自罰パラノイアという臨床類型と「治癒可能性」⁹⁹というその特性が示されたのであった¹⁰⁰。

しかしながら、1950年代に入り、クロード・レヴィ＝ストロースの仕事を紹介してラカンがシニフィアン概念を採用するようになると、了解関連という考えは徹底的に批判されることになった。『精神病』のセミナーでは、精神医学の対象を了解関連において理解するための心因 *psychogenèse* という考えについて、ラカンは精神分析の立場から「心因などというものは存在しない」¹⁰¹と主張し、ヤスパースに代表される現象学的アプローチを退けている。ラカンの思索に認められるこのような大幅な態度変更については、精神分析における言語観や人類学・社会学からの影響といった視点からの検討が必要であるが、これにかんしては別の機会におこなったので本稿では指摘するにとどめておく¹⁰²。

また、この時期になるとポリツェルに対するラカンの態度にも変化が認められる。精神分析理論を抽象化への偏向ゆえに批判したポリツェルの影響のもと、ラカンは学位論文において精神分析の方法と理論を峻別し、もっぱら前者のみを採用するという方針を取っていた。つまり、人間的現象の具体的かつ全体的把握にかんして、理論としての精神分析は不適とみなされており、これを補うかのように社会学や人類学の知見が積極的に参照されていた。しかしながら、1953年になると、フロイト的経験こそが他に類を見ない「人間的現実 *réalité humaine* の全体的把握」¹⁰³を可能にするものであり、精神分析の理論は同時に技法でもあるとラカンは主張するに至る。我々はこの表現にフロイトの心的現実 *réalité psychique* との一定の距離を読み取らざるを得ない——は、サンボリック・イマジネール・レエルという互いに異質なもののから織りなされる三つ組というかたち位置づけられた。以降、この三つ組においてラカンの反還元主義的立場は維持されることになる。

最後に指摘しておく、上述のようなかたちでのフロイト理論の受容は、ラカンが遅ればせながら無

意識概念を自らの理論へと組み込むことによって可能になったと考えられる。学位論文では、無意識 *inconscient* の語は概して、「気づいていない無自覚」という一般的な意味で形容詞的・副詞的に用いられており、精神分析に固有の用法とは慎重に距離をとるかたちで用いられていた¹⁰⁵。人格の社会的生成という考えを強調した学位論文以降、ラカンは社会学や人類学の知見を参照しながら、人間は社会的なものによって規定される存在であるという考えをひとつの軸に、精神分析へとコミットしていった。そうしたなかで、精神分析家とシャーマンの比較検討を通じて、無意識を象徴機能として大胆に読み替えたレヴィ＝ストロースの論文「象徴的効果」(1949)¹⁰⁶に、ラカンは大きな影響を受けることになる。そして、神話の形式や構造こそがその語彙や内容に優先するというレヴィ＝ストロースの主張に依拠して、無意識はイメージをはじめとした諸要素に法則を課す象徴的構造であるという考えが導き出されたのであった。だが、このような理解は幾分単純化されたものであり、それゆえに、1950年代のラカン理論が取り上げられる際には、それはサンボリックの優位とイマジネールの価値下げを主張するものであるという読みが広められることにもなった。しかし、このような読みは、ラカンが後年に三つ組の各々の自律性と等価性を改めて強調したことを踏まえるならば、やはり一面的と言わざるを得ない。既に紙幅が尽きたので詳論は別稿に譲るが、ラカンは「フロイトへの回帰」を唱えて以降、互いに還元不可能な三つ組によって精神分析という経験をとらえようとしたのであり、我々はここに一貫した反還元主義的立場を認めるのである。

付記

本稿の執筆にあたっては JSPS 科研費 21K00104 の助成を受けた。

脚注

- 1 河野一紀 (2021) 機械論的器質論への二つの応答—ラカンのパラノイア論とエーの器質・力動論、『I.R.S.—ジャック・ラカン研究』、第 20 号、21-58 頁。
- 2 Brigandt, I.& Love, A. (2008) Reductionism in biology. *The Stanford encyclopedia of philosophy*. <http://plato.stanford.edu/archives/fall2008/entries/reduction-biology/>
- 3 Lacan, J. (1932/1975) *De la psychose paranoïaque dans ses rapports avec la personnalité*. Seuil. p.13. (『人格との関係から見たパラノイア精神病』、宮本忠雄・関忠盛(訳)、朝日出版社、12 頁。)
- 4 クレペリンは 1896 年に刊行された『精神医学教科書』の第 5 版において、疾患単位概念を導入し、状態像に基づいたそれまでの分類からの転換を図った。疾患単位とは、それ固有の原因、症状、経過、転帰、特定の解剖学的変化をもつ病態のことを指す概念である。
- 5 *ibid.*, p.14.: 同書、12 頁。
- 6 パラノイアを人格の病とみなす発想の由来のひとつは、学位論文でラカンが参照しているヤスパースの 1910 年の論文に求められる。ヤスパースは、嫉妬妄想が患者の人格における緩徐な発展 *Entwicklung* の帰結であり、発展していく妄想体系は了解可能で、過程 *Prozeß* によって引き起こされる突発的で了解不能な妄想とは区別されると主張した。Jaspers, K. (1910) *Eifersuchtswahn. Ein Beitrag zur Frage: „Entwicklung einer Persönlichkeit“ oder „Prozeß“?* *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie*. 1, (1). pp.567-637.
- 7 Lacan, J. (1966) *De nos antécédents*. *Écrits*. Seuil. p.65.
- 8 この点について、ラカンは以下のように述べていた。「人格に固有で、しかも人間行動の共通の尺度があらわされる了解関連によって定義される一貫性を考慮に入れることは、そうした人格の現象の生物学的基礎を否定することにはならない。これらの現象の決定論はそこで消え失せるどころか、むしろ確固としたものとして現れる」。Lacan (1932/1975) *op cit.*, p.14.: 前掲書、12 頁。
- 9 *ibid.*, p.335.: 同書、355 頁。
- 10 後で取り上げるウィリアム・ジェームズの純粹経験論もまた、主観主義と客観主義の対立を止揚する試みとして位置づけられる。
- 11 Politzer, G. (1928) *Critique des fondements de la psychologie: la psychologie et la psychanalyse*. Rieder. p.116. (『精神分析の終焉—フロイトの夢理論批判』、寺内礼(監修)、富田正二(訳)、三和

書籍、2002年、280頁。) なお、仏語版は Édition numérique hors-commerce (PDF) を参照している。引用頁は仏語版と邦訳を併記しているが、訳文は仏語版からの筆者の翻訳による。

¹² Politzer, G. (1929) *Psychologie mythologique et psychologie scientifique. Ecrits 2: Les fondements de la psychologie*. Editions sociales. p.80.

¹³ ポリツェルが *drame* の語に写実主義 *réalisme* の含みを持たせていたことは、以下の記述からも明らかである。「ここではっきりと理解してもらいたいのは、我々が「ドラマ」の語で事実 *fait* を示したいこと、この語からロマン主義的な響きを完全に捨象していることである。したがって、読者にはこの語の単純な語義に慣れ、この語が有している「感動的な」意味を忘れてもらいたい」。 *ibid.*, p.10.: 同書、55頁。

¹⁴ *ibid.*, p.12.: 同書、46頁。

¹⁵ *ibid.*, p.26.: 同書、78頁。

¹⁶ *ibid.*, p.26.: 同書、78-79頁。

¹⁷ Politzer (1929) *op. cit.*, p.105.

¹⁸ *ibid.*, p.43.

¹⁹ Politzer (1928) *op. cit.*, p.35: 前掲書、98頁。

²⁰ *ibid.*, p.10.: 同書、41頁。ラカンもまた症例エメを取り上げるなかで、彼女による「文学的手記の分析」をおこなっていた。Lacan (1932/1975) *op. cit.*, p.153.: 前掲書、145頁。

²¹ ルイ・アルチュセールは、ポリツェルによるフランス哲学への精神分析の導入を評価しつつも、彼が自ら提唱する具体心理学の対象を定義する際に「具体」、「ドラマ」、「一人称」という語を繰り返しながら、抽象という方法を否定するかたちで議論を進めることにとどまり、理論的概念を何も提示できていないことを批判している。Althusser, L. (1996) *Psychanalyse et sciences humaines: Deux conférences (1963-1964)*. Le livre de poche. pp.37-38. (『精神分析講義—精神分析と人文科学について』、宇波彰(解説)、信友建志・伊吹浩一(訳)、作品社、46-47頁。)

²² *ibid.*, p.346.: 同書、365頁。

²³ 自罰パラノイアは原型として位置づけられることで、クレペリン的な疾患単位 *entité morbide* から慎重に遠ざけられている。ラカンにとって、後者は抽象化を通じて恣意的に規定された枠組みに過ぎず、その自律性を支持することはできないという。 *ibid.*, p.267.: 同書、285頁。

ちなみに、ラカンと同様、アンリ・エーもまた精神病は疾患単位という発想とは相容れないことを指摘していた。Ey, H. (1948/2006) *Études psychiatriques. Nouvelle édition. tome I*. Crehey. p.63.

²⁴ *ibid.*, p.347.: 同書、365頁。

²⁵ *ibidem.*: 同書同頁。

²⁶ *ibid.*, p.316.: 同書、333頁。

²⁷ *ibid.*, p.326.: 同書、344頁。

²⁸ *ibid.*, p.334.: 同書、354頁。

²⁹ *ibid.*, p.338.: 同書、357頁。

³⁰ *ibid.*, pp.314-315.: 同書、331-332頁。

³¹ *ibid.*, p.324.: 同書、341頁。

³² ラカンによれば、フロイトが自我の発生を説明する際に持ち出す現実原理は、そこに少なくとも客観性原理の根を含んでいないならば、快原理とは区別されえないという。つまり、現実原理は、知覚・意識としての自我、あるいは認識の主体としての自我という抽象概念を前提としており、この点において批判の対象となるのである。ここでの主張は、「現実原理の彼岸」(1936)を皮切りに展開されるラカンの思索の方向づけのひとつになっているという点で、極めて重要であることを強調しておきたい。

³³ *ibid.*, p.39.: 同書、36頁。

³⁴ *ibid.*, p.266.: 同書、284頁。

³⁵ ラカンは、その意義を高く評価するクレッチマーの性格学における諸類型に言及した際には、「これらの類型は、実験的な刺激への要素的反応によってではなく、もろもろの出来事への、すなわち、その生の射程と意味にかんする価値のすべてにおいて生きられる出来事への全体的心的反応によって規定される」と指摘していた。 *ibid.*, pp.89-90.: 同書、83頁。

³⁶ *ibid.*, p.317.: 同書、333頁。

³⁷ Jaspers, K. (1913) *Allgemeine Psychopathologie*. Springer. p.14. (『精神病理学原論』、西丸四方(訳)、みすず書房、28頁。)

³⁸ 周知のように、了解という概念は、ヨハン＝グスタフ・ドロイゼンによって提唱された区別——自然

科学は事物の説明を目的とするのに対して、歴史学は現象の理解を目的とするという区別——に由来している。ドロイゼンの考えを引き継ぐかたちで、ヴィルヘルム・ディルタイは説明を自然科学、了解を精神科学の方法として位置づけ、ヤスパースもまたこうした流れを受けて、了解概念を精神医学に導入したのであった。

³⁹ *ibid.*, p.147.: 同書、181-182 頁.

⁴⁰ *ibid.*, p.38.: 同書、35 頁. また、こうした発想には、「ある人格の傾向から人生全体を導き出すことができる」というヤスパースの指摘の反響を読み取ることができよう。 Jaspers (1910) *op. cit.*, p.612.

⁴¹ *ibid.*, p.38.: 同書、35-36 頁.

⁴² *ibid.*, p.38.: 同書、36 頁.

⁴³ *ibid.*, p.39.: 同書、36 頁.

⁴⁴ フィリップ・シャスランは、各症状が独立にあらわれて調和を欠いている病態を不統一 *discordance* と形容し、不統一精神病 *folie discordante* の語を用いた。これはオイゲン・ブローラーの精神分裂病にほぼ相当すると考えられている。濱田秀伯 (2009) 精神症候学 第 2 版、弘文堂、401 頁.

⁴⁵ *ibid.*, p.311.: 同書、327 頁.

⁴⁶ Politzer (1928) *op. cit.*, p.116: 前掲書、280 頁.

⁴⁷ *ibid.*, p.45.: 同書、377 頁.

⁴⁸ *ibid.*, p.47.: 同書、43 頁.

⁴⁹ *ibid.*, p.335.: 同書、355 頁.

⁵⁰ *ibid.*, p.336.: 同書、355 頁.

⁵¹ *ibidem.*: 同書同頁.

⁵² *ibid.*, p.310.: 同書、326 頁.

⁵³ Politzer (1928) *op. cit.*, p.37. : 前掲書、102 頁.

⁵⁴ *ibid.*, p.7.: 同書、31 頁.

⁵⁵ Taine, H.(1870) *De l'intelligence: Tome 2*. Hachette. p.40.

⁵⁶ ここでのイメージと「現実」の照合判断を下す知覚の主体は、ラカンがフロイトの自我概念をめぐる議論に対する批判で取り上げた、認識の主体あるいは知覚・意識としての自我と重なる。

⁵⁷ Soler, C. (2002) *L'inconscient à ciel ouvert de la psychose*. Presses universitaires du Mirail. p.30.

⁵⁸ Lacan, J. (1936) *Au-delà du principe de réalité. Écrits*. Seuil. p.92.

⁵⁹ 『物質と記憶』(1896)でのイメージの脳局在論批判を評価する一方、イメージの展開にかんするベルクソンの優柔不断な態度をラカンは批判し、自らのアプローチがむしろ「アメリカの实在論者たち」に近いと述べる。そして、ウィリアム・ジェイムズの名は挙げずに、「中性経験」という考えが「認識形而上学的主観主義の二律背反の錯覚」を回避することを可能にすると指摘している。補足しておく、ここでの「中性経験」とは、それ自体は主観でも客観でもなく、それらを構成する無属性の素材としての純粹経験を指している。 *ibid.*, p.336.: 同書、413-414 頁. また、学位論文ではベルクソンに由来する「現実との生きられる接触」という生気論的概念をもとに精神病論を展開していたウジェーヌ・ミンコフスキーに対する批判をおこなっている。 *ibid.*, pp.255-256.: 同書、274 頁.

ところで、ラカンの反ベルクソンの態度には、ポリツェルの影響が指摘されている。Bianco, G. (2016) Introduction: Une siècle de psychologie concrète. *Georges Politzer, le concret et sa signification: Psychologie, philosophie et politique*. Hermann. p.31. 1946 年の講演において、ラカンはパラノイアを欠損ではなく「思考の現象」と主張する学位論文が引き起こした反発について言及しているが、その際、自らの仕事と、「ひとつの世代の「知的欲求」を満たしていた膨張する統合」——それは実際のところ「形而上学的腹話術の実践のとても興味深い寄せ集め」に過ぎないとラカンは言う——が見出されていた「ベルクソンの仕事」との距離を強調している。Lacan, J. (1946) *Propos sur la causalité psychique. Écrits*. Seuil. p.163. また別の機会には、自らの学位論文は、「当時の教師が無知をベルクソンによって説明することで、良識とみなしたこと」とは相容れないものであると記していた。Lacan, J. (1966/1970) *Préface à l'édition française des Écrits en livre de poche. Écrits*. Points-Seuil. p.9. ラカンによるベルクソン批判については以下の文献も参照。Bianco, G. (2015) *Après Bergson: Portrait de groupe avec philosophe*. P.U.F. pp.223-228.

⁶⁰ Lacan (1932/1975) *op. cit.*, p.336.: 前掲書、356 頁.

⁶¹ 学位論文でのラカンの意図が反器質論でなく、反局在論にあったという指摘については以下を参照。西依康 (2021) 精神医学における構造概念の導入—ミンコフスキーからラカンへ、『I.R.S.—ジャック・ラカン研究』、第 20 号、19 頁.

62 ラカンは学位論文において、クライストのパラノイア論を2本参照している。

Kleist, K. (1911) Die Streitfrage der akuten Paranoia: ein Beitrag zur Kritik des manisch-depressiven Irreseins. *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie*. 5. pp.366-387.

Kleist, K. (1913) Die Involutionsparanoia. *Allgemeine Zeitschrift für Psychiatrie*. 70. pp.1-64.

63 *ibid.*, p.297.: 同書、313頁.

64 *ibid.*, p.297.: 同書、410頁.

65 Lacan, J. (1931) Structures des psychoses paranoïaques. *La Semaine des Hôpitaux de Paris*. 14. p.440.

66 Lacan (1932/1975) *op cit.*, p.51.: 前掲書、46頁。同様に、植物形態学の知見を参照しつつ、同一の特徴とみなされるものでも、実際には、全く異なる構造を有するものの形式的相同に過ぎないこともあるとの指摘がなされている。ここで参考文献として挙げられているのが、ゲーテの自然哲学・形態学 *morphologie* に根ざした形態学的生物学を提唱した植物学者ヴィルヘルム・トロールの以下の著作である。Troll, W. (1928) *Organisation und Gestalt in Bereich der Blüte*. Springer.

67 *ibid.*, p.338: 同書、357頁.

68 ラカンはエーの名前を挙げ、器質と人格の二つの因果系列によってテーヌの平行論に反対するという点で、自分たちの立場は「完全に一致する」と述べている。ここでの二つの因果系列は、エーが後に提唱する部分的解体（道具的機能、運動・感覚領野における解体）と全体的解体（心的統合を司る高次機能の解体）の区別と重なると考えられよう。とはいえ、エーとの見解の違いは既にあったようで、ラカンはエーを「最上の支援と最上の批判」をもたらす「よき話し相手」と形容している。*ibid.*, p.45.: 同書、377頁.

69 *ibid.*, p.337: 同書、356頁.

70 *ibidem.*: 同書同頁.

71 *ibid.*, p.337.: 同書、414頁.

72 Uexküll, J., Kriszat, G. (1934) *Streifzüge durch die Umwelten von Tieren und Menschen: ein Bilderbuch unsichtbarer Welten*. Springer. (『生物から見た世界』、日高敏隆・羽田節子(訳)、岩波文庫、126頁.)

73 ここでは、フロイト理論をもとに、リビード備給されたイメージが個体にとって有意義なイメージとなると考えられている。ちなみに、ラカンは人格の現象にとっての共通尺度としてリビード、すなわち「心的エネルギー」の重要性を強調していた。*ibid.*, p.321.: 同書、337-338頁.

74 付言しておく、ジェイムズは純粹経験の分化の契機としての身体の重要性を強調していた。

75 後の鏡像段階論では、イメージに代わってイマーゴ *imago* の語が用いられているが、ラカンはその機能を「有機体とその現実、つまり、内的世界と環世界とのあいだの関係を打ち立てること」と定義している。Lacan, J. (1949) Le stade du miroir comme formateur de la fonction du Je: telle qu'elle nous est révélée dans l'expérience psychanalytique. *Écrits*. Seuil. p.96.

ところで、ユクスキュルは個体と環世界の関係を論じるにあたって、適応 *Anpassung* ではなく適合 *Einpassung* の語を用い、個体は固有の環世界にいつも適合していると述べていた。この点と関連して指摘しておく、ラカンは後に自我心理学が強調する自我の適応機能という考えを徹底的に批判し、「内的世界から環世界へのサイクルの急変は、果てしない自我の円積問題を引き起こす」と述べていた。*ibid.*, p.97.

76 別の機会には、ラカンは人格に以下のように定義を与えていた。「動物・人間の固有性をかたちづくる特殊な機能的諸関係、あるいは、人間の環世界 *milieu*、すなわち社会が動物・人間の生きる環世界において有している強大な流れに動物・人間を適応させる諸関係の総体」。Lacan, J. (1933) *Exposé général de nos travaux scientifiques. De la psychose paranoïaque dans ses rapports avec la personnalité*. Seuil. p.400.

77 Lacan (1932/1975) *op cit.*, p.41.: 前掲書、38頁.

78 *ibid.*, p.41.: 同書、39頁.

79 *Ibidem.*: 同書同頁.

80 本稿では、ラカンの平行論がどの程度スピノザに依拠しているかについての詳細な検討には踏み込まない。ところで、シャンタル・ジャケはスピノザにおける心身合一を平行論 *parallélisme* ではなく、相等性 *égalité* というかたちで理解するという提案をしている。彼女によれば、観念と物あるいは精神と身体とのあいだの相同性や一対一対応を前提とする心身の平行論は、スピノザ自身ではなくライプニッツに帰せられるべき考えであるという。ジャケは「神の思惟する能力は、神の行動する現実的能力に等し

い」(第2部定理7系)という一節をもとに、平行論に代えて両者の相等性を強調し、この相等性は「人間精神を構成する観念の対象のなかに起こるすべてのことは、人間精神によって知覚されねばならない」(第2部定理12)という意味において、観念と対象の相関をあらわすと述べている。ここに我々は、イメージを媒介としたラカンの平行論の構想との近さを見出さないだろうか。Jacquet, C. (2004) *L'unité du corps et de l'esprit: Affects, actions et passions chez Spinoza*. P.U.F.

⁸¹ *ibid.*, p.342.: 同書、361-362頁.

⁸² ジャン・アルーシュは、「この学位論文はそれ自体、最終的にはこの翻訳を正当なものとして生み出すことになる議論の展開に過ぎない」と指摘している。Allouch, J. (1982) *Du discord paranoïaque. Littoral*. 3-4. p.95.

⁸³ *ibid.*, p.342.: 同書、362頁.

⁸⁴ *ibid.*, p.343.: 同書、362頁.

⁸⁵ *ibid.*, p.339.: 同書、358頁.

⁸⁶ Misrahi, R. (1982) Spinoza en épigraphe de Lacan. *Littoral*. 3-4. p.74.

⁸⁷ *ibid.*, p.254.: 同書、273頁.

⁸⁸ しかし、ラカンは真の認識と妄想的認識は「社会的承認 *assentiment social*」という客観性を有した基準によって区別されると述べていたことを踏まえるならば、この個人内の不一致/不協和は、個人間のそれに移行可能であると考えられる。*ibid.*, p.337.: 同書、356頁.

⁸⁹ 先の引用に認められるように、ラカンは *affectus* を病の意味をもつ *affection* へと訳し、これを精神病と結びつけて自説を展開している。これに対して、ミスライは *affectus* が *affect* と訳されるべきであると指摘したうえで、スピノザにとって *affectus* とは情念 *passion* であり、病や病的なものを含意しないと述べる。他方で、シャルル・アピューンの翻訳では *différer* の一語で訳されている *discrepare* と *differre* を、ラカンが *discordance* と *différer* の語で訳し分けている点を評価している。*ibid.*, p.75.

⁹⁰ *ibid.*, pp.75-76.

⁹¹ ミスライは、スピノザの学説において、「人間とは、自らが発明した諸価値を媒介とする、社会的・情動的・理性的関係のなかでの、自らに固有の欲望の歴史的かつ具体的な開陳である」と述べているが、この見方は学位論文におけるラカンの主張と符合する。*ibid.*, p.83.

⁹² *ibid.*, p.311.: 同書、327頁.

⁹³ バートランド・ラッセルによって『心の分析』(1921)で提出された概念である「行動のサイクル」は、「何らかの多少とも明確な状態が実現されるまで、中断されない限り、継続する一連の活動」であり、一般に不快によって生じ、快によって終わると定義されている。Russell, B. (1921) *The Analysis of Mind*. George Allen & Unwin. p.75. ところで、この概念は、生物とその環境のあいだに閉じた円環を想定させるという点において、ユクスキュルが環世界の構成要素として提示した機能環 *Funktionskreis*—知覚世界と作用世界が連動し、主体と対象がそこにおいて結びつけられる円環—との近親性が認められる。ちなみに、ジェイムズの純粋経験の哲学を存在論としての中性一元論として解釈する立場から、ラッセルは同書での議論を展開している。ひょっとすると、心身問題に対するスピノザの議論に、ラッセルの中性一元論との近さをラカンは認めていたのかもしれない。

⁹⁴ *ibid.*, p.85.

⁹⁵ Moreau, P.-F. (1987) Taine lecteur de Spinoza. *Revue Philosophique de la France et de l'Étranger*. 177, (4). pp.477-489.

⁹⁶ テーヌは『ティトゥス・リウィウス論』の序文で、以下のように述べていた。「スピノザ曰く、人間は自然のうちで「国家のなかの国家」として存在しているのではなく、ある全体のなかのひとつの部分として存在している。我々であるところの精神的自動機械の運動はまた、それを含む込んでいる物質的世界の規則と同じ規則に従っているのだ」。Taine, H. (1856) *Essai sur Tite Live*. Hachette.

⁹⁷ ラカンとテーヌの関係を検討するにあたっては、スピノザのみならずヘーゲルにも注目する必要があるだろう。テーヌとスピノザ、ヘーゲルの関係については、以下の文献が参考になる。杉山直樹 (2021) テーヌのスピノザ主義、『スピノザと19世紀フランス』、岩波書店。

⁹⁸ *ibid.*, p.276.: 同書、294頁.

⁹⁹ *ibid.*, p.347.: 同書、366頁.

¹⁰⁰ 自罰 *auto-punition* という現象については、学位論文でラカン自身も言及しているが、エスナールとラフォルグが先んじて論じていた。彼らの論文では、自罰の機制はエディプスコンプレックスの三項関係というフロイトの理論 *doctrine* に基づいて理解されている。とりわけ神経症においては、自罰は近親姦に対する超自我・父からの去勢という罰を予防的に回避するための方策として定式化された。他方で、精

神病において自罰は、一般に神経症よりも深刻であるが、それと認めることが困難であると指摘される。というのも、精神病ではエス-自我-超自我の分化された構造が神経症ほどに明確でなく、個人の内的現実と外的現実の区別もまた不明瞭と考えられているからである。さらに、重度の症例では、自罰は心的なもの自体の破壊をもたらすとされ、それゆえに精神病では道徳的人格の解体、責任の拒絶による葛藤の解消が認められるとの主張がなされている。そして、パラノイアにかんしては、シュレーバー症例を踏まえつつ、その病理の機制として投射 *projection* が挙げられているが、これは責任や過ちを他者へと転嫁する手段として位置づけられたのであった。Hesnard, A., Laforgue, R. (1930) *Les processus d'auto-punition en psychologie des névroses et des psychoses, en psychologie criminelle et en pathologie générale. Revue française de psychanalyse.* 4. pp.2-84.

これに対して、パラノイアの症状は志向性や責任と不可分な人格との関連から理解されるべきであるとラカンは考えたのであり、自罰による治癒という発想はエスナールとラフォルクの主張と鋭く対立する。付言しておく、彼らの主張はラカンが批判する現実原理の担い手としての自我という考えに基づいている。学位論文において、ラカンはエメの生活歴を再構成しながら、より具体的なかたちで超自我の生成を説明しようと試みる。彼女は家中で父の権威に反駁する術を知っていた唯一の存在であり、また母とは「並外れて強力な情緒的絆」で結びついていたことが明らかにされ、そのうえで、彼女に対して母の権威を行使していた姉との幼年期の葛藤こそ、リビード固着を生み出す情動的外傷の価値を有する出来事であるとの指摘がなされ、同胞コンプレクスの重要性が強調される。ここで問題となるのは、エディプスコンプレクスを基礎づける父への一次同一化ではなく、社会的拘束の審級の再体内化をもたらす二次同一化であり、後者が生じるリビード発達局面にエメの病理を特徴づけるナルシスの固着と同性愛欲動が由来するとラカンは考えた。

¹⁰¹ Lacan, J. (1955-1956) *Les psychoses.* Seuil. p.15.

¹⁰² 河野一紀 (2021) 言語はなぜ精神分析の問題になるのか?、日本心理臨床学会第40回大会自主シンポジウム (未公刊) .

¹⁰³ Lacan, J. (1953) *Le symbolique, l'imaginaire et le réel. Des noms-du-père.* Seuil. p.12.

¹⁰⁴ ラカンとポリツェルの距離は、発話行為 *énonciation* と発話内容 *énoncé* の関係にかんしても認めることができる。ポリツェルは一人称の「私」によって、発話行為の主体と発話内容における主体をすぐさま同一のものとみなしていたのに対し、ラカンはやがて両者のあいだの分裂を強調するようになった。また、後年、ラカンはポリツェルの名を「大学のディスクール」と結びつけている。Lacan, J. (1969-1970) *L'Envers de la psychanalyse.* Seuil. p.71.

¹⁰⁵ 河野一紀 (2021) 1930-40年代のラカンの思索における無意識概念について、『追手門学院大学学生相談室年報』、第31号、2-12頁.

¹⁰⁶ Lévi-Strauss, C. (1949) *L'efficacité symbolique. Revue de l'histoire des religions.* 135, (1). pp.5-27.